

日本古代文學史

西鄉信綱著



岩波全書 149

日本古代文學史

西鄉信綱著



岩波全書 149

はしがき

こんど出た『透谷全集』（勝本清一郎編）には新資料がたくさんおさめられ、透谷の先驅者としての偉大さが一層はつきりしてきたとおもうが、これをよんで特にわれわれの目をひくのは、透谷が日本の文學史にたいしても、實に深い關心と、すぐれた見解をもっていた點である。明治二三年（一八九〇）にかいた「文學史の第一着は出たり」という批評文のなかで、彼は文學史の必要を、「誰れか眞に今日の日本を知る者ぞ、誰れか眞に昨日の日本を知る者ぞ、又た誰か眞に明日の日本を知る者ぞ、多くの政治家あり、議論家あり、又た國粹家あり、而して眞に日本なる一國を形成する原質を詳かにする者は稀れなり、其人民の性情を窺はんと欲するが如きは、絶えてあらず、此に於いて余が文學史を望むの情一倍して來る」（第一卷二四六頁）という風に論じている。

文學史の意義を「眞に日本なる一國を形成する原質」をつまびらかにし、「其人民の性情」をうかがうことに求めようとする透谷の考えは、完全に正しいばかりでなく、ともすればひからびた文獻學的解題や狭い藝術主義的逸樂におちいりがちなわれわれ文學史研究者を、はげまし鞭うってくる高邁な氣魄を有している。理想的な文學史は、民族の心の自敘傳とし

て展開されねばならぬと思う。祖先たちの歩いてきた道と、現代のわれわれとの結びつきが、緊密な必然的關係によってとらえられ、そして祖先たちの歩いた道から、たえず教訓と自信、日本人として生きることの喜びと誇りを學びとり、くみとることができるよう、過去の文學的眞實が、具體的にかつ法則的に再現されなくてはならぬのだと思う。

もとより私の能力は、よくその任にたえうるころではなかった。努力はしたけれど右の課題には、はなはだ不十分にこたえることしかできなかった。それに今日、日本古代文學史をこうしたかたちでまとめることが適當であるかどうか、すくなからず疑問であった。基本的な點でまだ解決されていないことがらが相當たくさんあり、將來それらがどのような解決を見るに至るか豫測しがたいからである。本書をかきながら、そういう内外の障礙にたえずぶっつからざるをえなかった。だから私の分相應な願いは、本書によって、日本文學の内容が、ふつう世間で評價されているよりはずっと豊富であり、多様であり、受けつぐべき遺産としても非常に大事なものであるということのせめて一端をでも傳えることができたらしい點にかけられた。とくに古代文學は、民族形成の第一段階の時期の所産であり、かつ外國文化との廣般な關聯のなかにおかれ、他の時代の文學には類のすくない興味ふかい獨自性と規模の大きさをもっているものであることを知っていたきたかった。

こういふわけで私は、本書の批判の上にさらに文學史の研究が進歩することを望むとともに

に、これを機會に讀者が直接原典にしたしみ、日本および日本文學を一そう愛するようになられることを期待してやまない。

本書をかくのには、諸先輩の業績を攝取し、それらから恩惠をこうむることが多大であった。とりわけ、日本文學協會と歴史學研究會の人々からうけた温い指導と友情は、私にとつて一ばん大きな支えとなり、はげましとなった。自分がこれまで犯してきたいろんな誤りや間違いを、あるていど克服することができたのも、まったくこれらの人々の力に負うものである。だから貧しい仕事ではあるけれど、ひとりぼつんと書齋のなかでくらししていたならば、とうてい本書ていどのものをも私はかくことができなかっただろう。右の兩學界に深い感謝をささげたいと思う。と同時に、これらの指導と友情にたいし、また一般讀者の期待にたいし、本書では果しえなかつた責任は、今後の努力で埋めてゆこうと思う。岩波書店の方たち、また年表作成に共力して下さった北野克氏にも深く感謝したい。

思えば日本文學研究は戦争でもっともひどく破壊された學問である。生活はむろんのこと、學問の發展をねがう意味からも、われわれは世界の諸民族と友好關係を結び、ふたたび戦争にまきこまれないようにせねばならぬ。平和なくしては學問もなければ文學もない。

一九五一年四月

著 者

目次

序 説……………一

古代藝術の特質——古代的と近代的——文學史の時代區分——文學の永遠性と階級性——文學史におけるジャンルの意義

第一章 敘事詩の時代……………一三

一 英雄時代……………一三

英雄時代とは何か——原始社會の文學——原始社會から英雄時代へ——英雄的人間の特性——敘事詩的行動——敘事詩制作の時期の問題

二 古事記……………二七

古事記の成立——天武天皇、壬申の亂——古事記の矛盾——神代の物語——神話とは何か——神武天皇——仁德天皇——スサノオの命——倭建命——悲劇の時代

三 日本書紀、祝詞、風土記……………三二

書紀と古事記——文學としての祝詞——風土記の傳説

四 記紀歌謠……………六〇

記紀の散文と歌謠——記紀歌謠の民衆性——記紀歌謠人の生活——歌謠の形式

第二章 抒情詩の時代……………七一

一 抒情詩の形成……………七一

記紀歌謠より萬葉へ——敘事詩と抒情詩——抒情詩の本質

二 萬葉集……………七六

初期萬葉時代——柿本人麿——山上憶良——大伴旅人——山部赤人——抒情詩の完成——大伴家持——萬葉の民謡——個性詩と民謡

三 和歌と漢詩……………一三三

懷風藻と萬葉集——知の文學としての漢詩——大陸文化と民族文化——漢詩文の全盛——假名文字の發明——六歌仙時代——古今集、抒情詩の墮落

第三章 物語文學の時代……………一三三

一 散文の成立……………一三三

古代世界の危機——浪漫的精神の自覺——散文の機能——土佐日記

二 初期の物語……………一四五

物語の成立、特質——神話と物語——竹取物語——伊勢物語——和歌と物語——大和物語——物語文學の民族性

三 女流日記と隨筆……………一六一

女流文學の必然性——蜻蛉日記——家庭婦人の文學——紫式部日記——源氏物語作者の心——和泉式部日記——つれづれの精神——紫式部と清少納言——隨筆家としての清少納言——枕草子

四 宇津保物語と源氏物語……………一八九

物語文學の二つの典型——竹取物語より宇津保物語へ——宇津保物語の手法、構成、特質——落窪物語——源氏物語の本質——紫式部の物語論——源氏物語の女性——その主題——宇治十帖——宇津保物語と源氏物語との比較

五 古代末期文學の諸動向……………二二一

後撰集・拾遺集時代の和歌——神樂歌——民謡の力——催馬樂歌——源氏以後の物語——古代末期の和歌——俊成と西行——榮華物語——大

鏡——今昔物語——梁塵秘抄

結語……………二六一

古代文學から中世文學へ——平家物語——中世革命と文學

文獻解説……………二七三

年表……………二八三

索引

序 説

それぞれの時代の藝術はそれぞれ独自の特質を有するわけであるが、なかでも古代的藝術の特質は藝術史上とくに注目すべき重要な要素をなしているものと考えられる。かの文藝復興とよばれる偉大な運動が、古代藝術の発見と不可分に結びついた中世否定のヒューマニスティックな運動であったことは、ここに改めていうまでもなからう。ゲーテ、シラーによつて形成されたドイツ近代文學の活動的創出過程が、いかに多くの精力を古代ギリシヤ藝術からくみとり、それに鼓舞されたものであったかも著名な事實である。後者にかんじていうならば、ゲーテの「古代と近代」という論文、シラーの『素朴の文學と感傷の文學』という著作は、彼らにとって古代が何を意味し、彼らがどのような關心をたずさえて古代に對し、どのような眼で古代を眺めたかを明白に雄辯に物語っている。その根柢にあるのは、市民社會の俗物性に對する彼らの嫌惡であり、市民社會の散文性と詩的精神との緩和しがたい矛盾の意識であつた。そしてこの嫌惡と矛盾を克服しようとする旺盛な意欲が、彼らを古代憧憬へとかりたてたのである。そういう意欲の形象であるエルテルがその悩みの日々は何よりも愛

讀した文學がホメーロス詩篇であつたのは、したがって非常に象徴的である。

もちろんこれは一の典型的な例である。賀茂眞淵や本居宣長ら徳川時代の國學者のなした復古運動や、あるいは正岡子規を先頭とするアララギ派の萬葉主義運動が、右の例とは相當に違ふ内容をもつものであることはいうまでもない。それを規定したのは對象としての古代そのものの性格の相違、ならびにそれを想起する主體そのものの性格の相違という二つの契機であり、問題はいりくんでいて簡單でない。けれどもしかし多くの事實は、その相違にもかかわらず、かく古代がしばしば想起されたのは決して個人の恣意にゆだねられた現象ではなく一定の理由をもつ現象であつたことを教えている。それは何よりもまず、古代藝術そのものの特質に由來する。眞淵は『歌意考』の冒頭で「あはれ、あはれ、上つ代には、人の心ひたぶるに直くなん有りける」といい、人間が「設けず、作らず、誣しひず、教へず、天地あめつちに適かなひて」生きた古代を憧れたが、全體としての彼の論理は大きくねじまげられているにせよ、古代藝術が客觀的にもつこの素朴性という特質を考へることなしには、あらゆる古代復興運動の本質は理解されえないだろう。一般に、古代藝術には人間の眞實の姿が、階級社會に固有な道徳的・宗教的虚偽や、個人と社會との矛盾に根ざす人間的分裂や解體、あるいは感傷や主觀等によつて歪められ毒されることなく、素朴に、赤裸々に、自由に、明朗に、かつ客觀的・造型的に、生き生きとした感覺性を以て表現されている。だからこそそれは、人間の

封建的・近代的墮落に際し、それと闘おうとする精神（その闘いの諸形態の特殊性はここでは捨象する）により、人間性の故郷として、また理想社會として呼びもどされ、想起されたのである。では古代藝術にこのような特質をあたえた究極の要因は何であるかといえ、それは、古代が民族のかがやかしい幼年時代にあたり、古代藝術を創造した古代貴族が原始の無階級社會から初めて形成された、そしてその原始のよき傳統を發展的に背負うところの健康な人間であつたという點に求められる。(二)

④ 齋藤茂吉氏は、自分は何としても柿本人麿の偉大さに及ぶことができな、という意味の歎聲をもらしている。(三) ここにはいろいろの問題がかくされている。しかしわれわれはこの發言のなかに、日本の抒情詩はそれが最初に作られたとき最高の藝術的達成をしめたということ、いいかえれば抒情詩は『萬葉集』以後ふたたびと時代を劃するような古典的姿においては創造されなかつたという歴史的事實をよみとることが可能である。さらに記紀歌謡や人麿以前の初期萬葉歌のもつ自然そのものごとき形象性に對するとき、われわれの魂はどのような種類の感動にとらえられるであろうか。あるいは埴輪や飛鳥白鳳時代の彫刻のもつ、人體のつかみかたにおけるあの清明素朴な造型性の前に立つとき何を感じるであろうか。明らかに現代のわれわれと古代藝術との間には相當に永い時間的距離が横わっている。けれどもしかし實際の經驗によれば、その距離は決して生命のない死せる抽象的な距離でないばか

りか、むしろそこからうけとる藝術的感動はきわめて若々しく新鮮で直接的なものであり、かつしばしば他の時代の藝術からは容易にえがたい本質的・一回的な性質のものでさえあるのが普通である。この事實は、社會發展のしかたとは違い、また技術や學問や思想の歴史とは違って、文學の世界、藝術の世界では、古代から近代へと向って繼承されずに失われていった、古代にのみ固有な貴重な要素があること、藝術や文學のいわゆる「永遠性」の祕密がそこにかくされていることを暗示する。(三) 文學史や藝術史の第一の任務も、この要素が何であり、それがどんな姿で作品に顯現しているかを先ず具體的に指摘することにある。

しかしわれわれはもはや、あらゆる市民的學者・藝術家が究極的には陥らざるをえなかつた現代にたいするあの打ちかちがたい諦觀、現實にそむいて古代美の世界に回歸していったあの浪漫的主觀主義に見ならうわけにゆかない。彼らがこのような袋小路におちこんだのは、市民社會の矛盾を歴史的に克服すべき新しい階級の未發展に制約され、その矛盾の本質を正しく見ぬくことができなかつたからである。だからその直觀的洞察は偉大であり、意欲も旺盛であつたけれど、彼らの古代憧憬には眞の現實的基礎に缺けるものがあり、理論的認識も充分でなかつた。ところが、社會主義社會への力にみちた轉換期を生きつつある現代には、こうした袋小路を脱けだして、古代藝術の輝かしい素朴性を、より高い段階でふたたびともどすことのできる可能性が、その現實的基礎とともに公然と、かつ明確にあたえられよう

としている。

② そういう意味で現代における古代文學の研究は、近代的なもの own 自己批判とその自己否定とに内面的にむすびつくとき初めて主體性を獲得し、眞にみのり多い効果を期待しうるといつてよい。古い時代の文學をもちだすと、すぐにそれを回避であり、復古であり、切實でないことのように考えるのは文學の發展法則や、民族的傳統の何たるかを知らぬ偏見にすぎない。民族の全文學遺産が一齊に想起され、それらが同じルツボのなかで批判加工され、繼承發展せられようとするところに現代の意義があるのであり、そうした場合、「近代的」特質と對立するものとしての古代的特質は、とくに發展性を有する傳統として大きく顧られるに價するのである。(四) そして學問の課題は、これを文學史における必然性として客觀的に開示できるか否かにかけられている。

序 説

しかしながら、右にのべたような古代的特質を、本書であつかう古代文學のすべてが領有しているわけでは決してない。古代性にも、歴史に規定された形成と發展と消滅の過程があった。そして古代初期文學にそれは一ばんよく體現されたのである。古代解體期にあたる平安朝中期以後の文學になると、この古代性は著しく退化し、むしろ中世的性格がかなり濃厚になつてきている。このことは古代初期を代表する『古事記』、中期を代表する『萬葉集』等

を、後期の『源氏物語』に比較してみれば明らかに承認されるところである。(五)にもかかわらず本書では、『源氏物語』を中心とする平安朝中期以後の物語文學をも古代文學の範疇で理解しようとした。上限はともかく、本書であつかう古代文學の下限は、平安朝末期の院政時代につくられた『今昔物語』あたりに大體おかれている。そこで文學史における時代區分の問題に、いま簡単にふれておきたい。

文學史における時代區分は、最初の問題であるとともに最後の問題でもあると思う。最初の問題であるというのは、このことを考慮のなかにいれることなしには、文學史の第一義的に正當な認識は出發できないからである。それは文學史家の世界觀・意識の問題であり、歴史把握のしかたを客觀的に表現する形式である。そういう意味で時代區分は決して敘述上の單なる便宜問題にぞくしない。けれども、この時代區分が絶對的正確さに達するためには文學史研究の絶對的完成が必要なはずだから、それは同時にまた最後の問題でもあるわけである。その關係は相對的眞理と絶對的眞理との關係に相ひとしい。したがって、時代區分の問題がぎりぎりのところまで解決されないうちは文學史敘述は正當に出發することができぬと考えるのは間違ひである。それは文學史研究の實踐的過程において、一步一步と解決に近づいてゆくべき性質のものであらう。ここでとりあげる時代區分も、當然、この最初のものとしての時代區分に外ならない。そういう立場から本書では、古代文學史の對象と範圍とを限

定した。

つまり本書であつた古代文學は、從來、上古文學・中古文學、あるいは大和奈良時代文學・平安時代文學、その他の名稱できわめて便宜的によばれてきた文學史の範圍に相當する。以上のような便宜的區分法が適切なものでないのは明瞭である。それは單なるレッテル的呼稱であつて、何らそれが抱擁する一定の時代の文學の性質と内面的交渉を有していない。しかしいうまでもなく文學は社會と密接に聯關し、その聯關のしかたによつて性質や構造をみずから變貌させ、發展させてゆくのであるから、文學史の區分もそれに對應して歴史的になさなければ正しくない。われわれが從來の便宜主義をまったく廢して、古代文學という概念を導入しようとする理由は、文學史の眞實な姿に一そう近づきたいと欲するからに外ならない。古代文學という概念は、人類史の發展における古代・中世・近代という諸段階を前提とし、それに裏づけられた史的概念であつて、そこにはすでに一定の意味、すなわち文學の生産と享受が支配的には古代貴族階級によつてなされ、その階級性を荷なつたところの文學という一定の意味が豫想されているのである。それを文學の階級性とよんでいい。

序 說
先ほどふれた平安朝中期以後の物語文學、並びに院政期の『今昔物語』が非古代的要素を多分に有しながらも、なお古代文學という範疇でとらえることが可能でもあり正當であるゆえんも、文學のこの根本的階級性の見地からでなければならぬ。具體的な敘述はすべて本

文を参照せられたい。いわゆる文學の「永遠性」とこの階級的モメントとを、全き對立物であると思はし、後者を廢棄して「永遠性」にのみ固執しようとするのは、水の本質を蒸溜水に求めるのと同じく、これほど眞實から遠ざかったものはない。文學史のあらゆる眞實は、文學のいわゆる「永遠性」が、他の歴史諸現象と同じように、常にこの階級的モメントにおいて、このモメントを不可避の媒介として現象するものであることを、疑う餘地なく證示している。文學史の時代區分が歴史の時代區分と究極ではほぼ一致し、それに對應するのは、それ故かなり當然なことなのであり、それは決して後者の範疇を前者のなかに外部からもちこんだことを意味しない。そのようなわけでわれわれは、『平家物語』こそ中世文學の公然たる形成を宣言した作品であると考へる。

しかしながら文學が階級的モメントを通して現象する、その現象のしかたは必ずしも單純であるとは限らない。それは、文學が現實を形象的に反映し表現するさいに發揮する獨自な性格に由來するものである。本書では古代文學の發展過程を、第一章敘事詩の時代、第二章抒情詩の時代、第三章物語の時代という三期にわけて考察した。歴史的にみればこれはそれぞれ古代の形成期、繁榮期、没落期に相當するわけだが、ここではとくに支配的文學形態ジャンルの交替による區分法を採用した。この方法は土居光知氏『文學序説』のすでに採用したところであるから、本書はその驥尾に附したものと見て差支えない。なぜこの方法に従ったかと